

XenosagaI・II - 第十八話 救済 - Hilfe - 上

シオン：なに、いったいどうなってるの！

ジン：ふむ——どこかに引かれていくような感覚がありますね。

KOS-MOS：先ほどから、0.9974Gの加速が検出されています。

カナン：いや、これは加速というより——

モモ：！ 機動要塞が崩壊します！

破片多数、シールドを張ってください！

ケイオス：これは！

カナン：やはり、惑星に墜落しているのか。

Jr.：くっ、E.S.の姿勢制御を——みんな、バラバラになるなよ！

モモ：はい！ 大気圏突入フェイズに備えます！

シオン：わかったわ！

ジン：シオン、こちらのシートに、惑星の観測データをください。

シオン：データって——

KOS-MOS：こちらから転送します。——どうぞ。

ジン：ありがとう——やはり、この惑星は——

シオン：どうしたの、兄さん！

ジン：まさか、こんな形で里帰りすることになろうとは、ね。

シオン：！ まさか————

ジン：そう、ここは————

私たちの生まれた故郷、ミルチアです。

救 - Hilfe - 済

ケイオス：――各部チェック完了。機体の損傷を認めず。

KOS-MOS：ディナ、問題ありません。

モモ：ゼブルンも大丈夫です。

ジギー：――それにしても、にわかには信じられないな。

シオン：ええ――あの機動要塞、旧ミルチアの宙域まで8光年は離れていたのに。

Jr.：――アルベドさ。

シオン：え？

Jr.：あの要塞をブースターとして使ったんだ。

連邦軍と移民船団を鉢合わせさせて、自分はその隙に――奴が好きそうな小細工だぜ。

俺たちにそれを見せつけるのは目論見のうちだったんだろうが、

あのU-TIC機関のE.S.が現れたのは、さすがに計算違いだったんだろうな。

ジン：ふむ、それで――君はこの先、どうするのです？

Jr.：――追うさ。

俺たちの目的は、オリジナルゾハルの探索だが、奴を追ってりゃ、自然に達成されるはずだしな。

モモ：Jr.さん――

Jr.：そんな心配そうな顔、するな。奴と会っても、もう俺は大丈夫さ。

モモ：はい――――

Jr.：（あのエンセフェロンで、奴の望みは、わかったような気がするしな――）

シオン：え、なにか言った？

Jr.：いや、なんでもねえ、行こうぜ。奴は――この方角にいる。

ケイオス：すごいね――首都がそのままの形で残ってる。

Jr.：――なににもかも、あの時のまま、時間が止まっちゃってるんだよ。

ケイオス：――地の丘の国、その国は生けにえとなるべき運命にあった。

大地は二度も持ち上がり、夜のうちに消えうせた。

ついに地は割れ、その国と共に水没した――

シオン：ケイオスくん、それは――？

ケイオス：おとぎ話――――

遙か遠い昔、一夜にして海に沈んだ国の物語だよ。

シオン：生けにえ、か――この光景を見てるとそんな気にもなるわね。

ケイオス：――そうだね。

シオン：――――

（ここがミルチア――

あの時、ネピリムは言った――）

ネピリム：いずれ話せる時が来るわ。すべての始まりであったあのとき、あの場所――
あのミルチアへ行けば――そうすれば――

シオン：（ネピリム、私たち、来たわ。ミルチアへ――
もうすぐ、すべてを話してくれる――のよね）

――

ケイオス：みんな、ちょっと寄り道してもいいかな。

ジン：ふむ、地下シェルターのようですね。

ジギー：まだ稼働するものが残されているとは――

ケイオス：十四年前、カナンと一緒に見つけたんだ。
なにかの役に立つなら――と思ってメンテしておいたんだけど。

――

ジン：ほう、ここなら休息にも補給にも問題ないようですね。

Jr.：すげー、信じられない用意周到さだな。

ケイオス：うん、正直言って、僕も驚いた。

カナン：あの時は、無駄なことをする――と思ったものだが。

――

シオン：これは――――

ジン：ほう、U-TIC 機関の強襲艦ですね。どうやら、機関を損傷しているようだ。

シオン：なんでこんなところに――

Jr.：一戦やらかすより、やりすごした方が得策だな、こいつは――

シオン：――――同感。

???『くおらあつ、そこっ！ なにやっ取るかああっ！！』

Jr.：き、気づかれた！？

???『主機の修理に何時間かけとる！ えーい、まだ動かんのかあっ！』

作業員『ですが、要塞の爆発に巻き込まれ、いずこともつかぬ宙域に跳ばされ、大気圏に落下させられ――

艦体の被害は予想以上に深刻なものであります！』

Jr.：（外部スピーカー？ 切り忘れてんのか？）

シオン：（この艦も、一緒に跳ばされてきたのね――）

???『ええい、言い訳なぞ聞く耳持たあんな！』

作業員『現在、総員で取りかかっておりますが、みな、先の演習から連戦で疲労しております。

ここは小休止をお与えになっては――』

???『おまえら、全員並べえっ！

あの合同演習において最低の成績で、俺の顔にドロを塗ったことをもう忘れたのかあ！

俺の指示に従ええ！ 貴様らの判断などくそ食らえだあ！！

そこっ、なにを笑っとる！

――なぜ笑っとると聞いとるんだあああっ！！！！』

作業員『ぐほあ！』

作業員『うぐあ！』

作業員『ぐふう！』

作業員『ごはあ！』

???『俺をなめるなあ！ 全員即刻、腕立て1億回！

貴様らの上腕二頭筋を破壊するうううっ！』

ジン：（やれやれ――）

ジギー：（なんという指揮官だ――）

モモ：（ひどすぎます――）

オペレーター『警告――！ 甲板直上に未確認機発見！ 数3！』

???『なんだとおっ！』

Jr.：ちっ、見つかった。

???『各員、戦闘準備！ 目標――識別不明A.M.W.S.！

これは訓練ではないっ、全員、ありったけの根性を見せてみろおっっ！！

俺はプロトドーラで出る！ 根性ある奴はついてこいっ！！』

Jr.：なんだあ、A.M.W.S.だと思ってんのかよ。

シオン：E.S.の力を見せてあげましょう。

【 E.S. 戦 VS プロトドーラ 】

??? 『U-TIC 機関、ばんざ あああいっ!!! 』

Jr.: やれやれ、たまんね一相手だったな。

シオン: 私たちのこと、連絡されちゃったかしら。

Jr.: さあな。おおざっぱな艦長らしかったから、忘れてくれてること、祈ろうぜ。

- 

蒼い外套の男: ーやれやれ、またこの忌々しい惑星を拝む日が来るとは思わなかったぜ。

黒い外套の男: ー君たちには、旧知の惑星だったのだな。

蒼い外套の男: ほっ、なんだお前、しゃべれるんじゃないか。
初めて、声聞いたぜ。

黒い外套の男: ーそれは失礼をした。

緋い外套の男: では、行動を開始しよう。役者たちがゾハルに到着する前に、接触しなければならない。

蒼い外套の男: 言われるまでもねえよ。降下した E.S. は 3 と 2 と 1ーちっ、散らばりやがったな。

緋い外套の男: 3 機のところへは、私が向かおう。

蒼い外套の男: おっと、勝手に決めないでくれよ。あいつらに因縁があるのは、あんただけじゃねえよ。
なあ、そうだろう？

黒い外套の男: ー

蒼い外套の男: シオンは俺が引き受けてやるよ。かまわねえだろう？

緋い外套の男: ーよかろう。私はアルベド・ピアソラと接触する。

蒼い外套の男: そうふくれるなよ。アベルの方舟を呼び出すためには、奴が重要な鍵なんだろう？
まあ、あれだけ目立つ奴なら、いかにも注目集めそうだしなあ。

黒い外套の男: では、残り物をいただくとしよう。半端物だが、私は気にしない。

緋い外套の男: ー地表に降下する。くれぐれも、各々の E.S. と対象の E.S. の接触時には、
注意を払ってほしい。特に、イエオーシェアがいることだしな。

蒼い外套の男: へっ、あの大將はなんにもできねえと思うがよ。いや、”しねえ” かー。

じゃ、行ってくるぜ。

黒い外套の男：――委細承知。

緋い外套の男：（いつまで、彼が過去を怖れたままでいてくれるか、知れたものではないのだから――
すべてはシオン、君にかかっている――）

水没都市

Jr.：さあ、いよいよだな。

ケイオス：――この辺りが、旧ミルチアのかつての首都。この先が、十四年前のあの事件がおこった爆心地。

U-TIC 機関の研究施設が乱立していた場所――

中でも、もっとも重要な研究を行っていたエリアが――

ジン：通称”ラビュリントス”。

オリジナルズハルは、いまでもラビュリントスの中枢深くに眠っているはずです。

シオン：（オリジナルズハルが――だったら、セシリーとキャスもそこにいるかもしれない――）

Jr.：ん？　なんか言ったか？

シオン：――ううん、なんでもないわ。急ぎましょう。

――

シオン：あれは――ラビュリントスのタワーね。

Jr.：ああ、いよいよ来たぜ。

モモ：ここ、エンセフェロンダイブした時に来た場所ですよ。でも――

ジギー：ああ、傷みがひどいな。

カナン：戦乱と十四年分の時間を経ているのだからな。無理もない。

シオン：（そうだ、ラビュリントスが見える。じゃあ、この近くに――）

ジン：シオン――！？　E.S.を降りては――

Jr.：お、おい、待てよ――

――

シオン：はあ、はあ、はあ――
（私の記憶が間違っていなければ――
そう、この先に――）

シオン：父さん――母さん――
いやああああっ！

フェブロニア：シオンを連れて逃げてください！

???：よせ、そいつらは正気じゃない！

フェブロニア：いいんです！ 私のことはかまいません――はやく！
あ！

に――げ――

シオン：あ――ああ――

――

ジン：（我々の両親の遺体は、いまでもこの先の重篤神経症治療施設に眠っている
だからこそ、シオンは第二ミルチアの、私が作った墓に行きたがらなかった――）
：む！ この音は――アニマの器の干渉――？

――

シオン：（見えた、あそこが――！）
あ――あ――

ジン：――シオン！
（くっ――あの敵機、わざと治療施設の上に？）

蒼い外套の男：よおう、久しぶりだな――
会いに来てやったぜ、シオン。

シオン：いやあああああっ！

ジン：シオン！

シオン：父さん！ 母さん！ いやあああああっ！

ジン：落ち着くんです、シオン！ あそこはただの墓所だ。お前はもう、過去を乗り越えたはず！

蒼い外套の男：おやおや、ちょっと刺激が強すぎたかな。

モモ：シオンさん――！

Jr.：！ あれは――E.S.か！

ジギー：見たことのない機体だ。

U-TIC 機関員：なんだ、いまの轟音は！

U-TIC 機関員：あ――あの機体は！

ジン：まずい、ラビリントスを護っていた部隊がこちらに――

U-TIC 機関班長：発砲を許可する、撃ていっ――！

蒼い外套の男：ごちゃごちゃと――うるせえぞっ！

U-TIC 機関員：うわああああああっ！

U-TIC 機関班長：ぐうううっ！

ジン：なんということをして――

カナン：躊躇なく、攻撃したな。

Jr.：だが、チャンスだ。いまのうちにシオンを連れていこうぜ。

モモ：ええ！

シオンさん、大丈夫ですか！

シオン：いや、触らないで――！！

モモ：きゃっ！

シオン：やめて！ 近くに來ないでよ！

――レアリエン！

Jr.：！

ケイオス：！

ジギー：！

モモ：！

ジン：――――――

スオウ：あれは――アスラ 27 式！

（なぜ、あの戦闘用レアリエンが――）

シオン！ はやく中に入れ！

シオン：なに？ どうしたの？

スオウ：いいから、はやく！

シオン：父さん！ なにするの！？

開けて、父さん！ 開けてよ！

スオウ：ぐわあああああっ！

シオン：父さーんっ！

シオン：いや、いやぁー父さんー

モモ：シオンーさんー

シオン：触らないで！ あなたたちレアリエンがーフェブを、父さんをー

フェブを！ 父さんと母さんを！ 返してよぉー

ジン：シオン！

モモ：シオンさんー

蒼い外套の男：へええーこいつは意外だったな。

こいつのお綺麗な仮面を引っぺがしてやろうと思ったら、手を貸してやる必要はなかったな。

お為ごかしもいいところだぜ。

よう、そのレアリエン。どうだい、この女の本当の気持ちを知った気分は。

モモ：ー

蒼い外套の男：人間なんてヤツぁ、極限状態にならないと本心を見せないもんだからな。

あんたもいままでは、こいつの仮面しか見てなかったわけだ。

ケイオス：ー君たちの思い通りにはさせないよ。

蒼い外套の男：へえ、どういう風の吹き回しだい、大将ー

ケイオス：君たちの狙いはわかってる。ゾハルとの接触を前にやっておきたいことー

でも、そうはさせない。

蒼い外套の男：ふん、だとしてもーあんたになにができる？

そのレアリエンはシオンの本性を知っちゃった。

こいつは俺のせいでもなんでもないぜ。俺はただー

さらけ出しただけさ。

ケイオス：君は知らないんだね。

蒼い外套の男：ーなにに？

ケイオス：人が自分の意志で作らあげた、かくありたいという自分ーそれは仮面なんかじゃない。

それこそが、その人の本質なんだよ。

蒼い外套の男：へっ、あんたの口から人のなんたるかを教わろうとはねぇ。

俺はあんたと違って、人だったこともあるんだぜ。

ケイオス：知ってるよ。だから、あなたもそうだったはずだ。

かくありたいという自分、それを必死に作っていた頃があったよね。

蒼い外套の男：――――

――――貴様、

貴様に、なにがわかるっ！

Jr.：おい、シオンは！

ジン：すみません、まだ戦える状態では――

Jr.：ちいっ、俺たちだけでやるしかないか！

ケイオス：いまは、シオンをあてにしちゃダメだ！

KOS-MOS、シオンについていてあげて！

KOS-MOS：了解しました。

モモ：やりましょう、Jr.さん、みんな！

ジギー：こちらは問題ない。

Jr.：よし、相手がE.S.でも、こっちは2機だ。行くぞおっ！

【 E.S. 戦 VS E.S. ナフタリ 】

Jr.：シオン！

蒼い外套の男：ほう、まだ戦えるのか。

モモ：シオンさん！

シオン：――ごめんね、モモちゃん。さっきこの人が言ったように、あれが本当の私。

――――

私ね――過去を捨てられずにいる自分が嫌い。

だから、変わりたいの――自分を好きになれるように――

蒼い外套の男：へっ、無理無理。お前は、ただ過去を捨てられないだけじゃない。

心の奥底ではレアリエンをいまだに憎んでいる。だからこそ――

その感情を塗り隠そうと思うからこそ――

パフォーマンスでレアリエンに肩入れしていた。

そうだろう？ 思い出せ、それこそがお前の本質さ！

モモ：その、どこがいけないんですか？

蒼い外套の男：なに？

モモ：自分の本質を自分で変えていける——そのための努力ができる——それがヒトなんじゃないですか？

Jr.：——その通りだぜ。あんた、人だったこともあるって言ってた割には、

そんなことも忘れちゃったのか？ だとしたら、体だけでなく、心まで人を捨てちゃったんだな。

蒼い外套の男：——どいつもこいつもお為ごかしをよおっ！

【 E.S. 戦 VS E.S. ナフタリ 】

モモ：シオンさん、いまです！

シオン：ええ！

蒼い外套の男：ぐおおおおっ！

モモ：やったあ！

ケイオス：いや、まだだよ！

Jr. 「転移していくぞ！」

蒼い外套の男：まあ、目的はここまでで半ば果たしたからな。今日は引き上げてやるよ。

だが、覚えておけ。

お前が本当に、自分の深層心理を克服しつつあるのか——

それはラビュリントスの最深部で明らかになる。

シオン：どういうこと！？

蒼い外套の男：行ってみりゃわかるさ。待ってる——ぜ。

Jr.：くそっ、逃がしたか。なんなんだ、あいつは？ 天の車でも現れたよな。

シオン：——ええ。

モモ：シオンさん——

シオン：モモちゃん——

さっきはありがとう。

モモちゃんがああ言ってくれなかったら——きっと挫けてたと思う。

モモ：でも、モモだってずいぶん、シオンさんに救われてます。

Jr.：そうそう、お互い様ってやつさ。

ジン：（ふむ——どうやら、良い仲間たちを見つけていたようですね

しかし、この先で待つものに、あなたは耐えられるのでしょうか——）

シオン：どうしたの、兄さん。

ジン：いえいえ、なんでも。それより、先を急ぎましょう。

ラビュリントスは――このすぐ先です。

シオン：ええ、行きましょう、ラビュリントスへ――

（そこできっと、いろいろなことがわかるはず――そして――）

ねえ、兄さん――

ジン：なんです？

シオン：ゾハルが見つかって、全部決着がついたら――

帰りに、あそこに寄っても――いいよね。

ジン：もちろんです。二人で、会いに行きましょう。

シオン：――うん。

（たとえ瓦礫の山でも、あそこはたしかに――

父さんと母さんが眠っているんだから――）